博物館学雑誌 第24巻 第1号（通巻29号） 1～10ページ 1998年10月

【論文】

岩倉使節団の米欧博物館見学
—イギリスを中心に—（上）

The Japanese Embassy 1871-1873 and Museums in Western Countries
—With a Case Study of Their Museum Visits in Britain—

岩 本 陽 児*
Yohji IWAMOTO

Three main streams were identified in the formation of modern Japanese museums. One was founded by the Home Office to preserve the pre-modern cultural heritage. Next was the Educational Museum by the Ministry of Education. Both of them started as exhibitions in the early 1870s and were followed by the construction of local museums in the same categories. To these were added in the late 1870s, permanent exhibition centres to display commodities. These new facilities greatly increased in number since their foundation, however most of them ceased to exist by the turn of the century.

The first Japanese embassy sinse the 1867/68 revolution to twelve Western countries from December 1871 to September 1873 was called the Iwakura Mission after the name of the Chief Ambassador Extraordinary, and it played a crucial part in Japanese Westernisation at the very beginning of the modern era. There were museum promoters of the government in the mission as well as very powerful politicians of the day; however, there was no previous study for the Embassy of the context of museum history in Japan. In this paper their museum visit is discussed to identify their influence on Japanese museum history throughout the late nineteenth century. Their museum experiences in Britain in the autumn of 1872 were especially reconstructed with the aid of contemporary British records as well as their official report edited by K. Kume, the private secretary of the Ambassador Extraordinary.

As a result it became clear that they visited at least a dozen museums in Britain and visited the International Exhibitions at South Kensington twice. Their shared experience seems to provide a reasonable explanation for the exhibition centre boom of the country after the late 1870s.

1．はじめに
2．岩倉使節団について
3．岩倉使節団の博物館視察
4．岩倉使節団とイギリス
（以下次号）
5．岩倉使節団のイギリス博物館見学
6．おわりに

＊レディング大学大学院、イギリス連合王国
(University of Reading, England, UK)

平成10年7月21日 受理

1．はじめに

明治4(1871)年12月23日に横浜を出航してから同6(1873)年9月13日に帰航するまでの1年9か月間、アメリカおよびヨーロッパの先進12か国を歴訪した日本政府の大型外交使節団、通称岩倉使節団は、明治新政府による異文化接触の原体験である。これを対象にした研究は、かつては外交史を中心としていたが、1970年代の後半以降、本格的な歴史研究が深化し、研究の視点が従来注目されることの少なかった文物視察の方面に多様化するにつれ、この使節団の意義が改めて注目されるようになっている（田中1993、8－9）。

本稿の主題である博物館にかんしては、使節団の使命を述べた「大使全書」に「博物府、図書庫」というテーマが文部大丞、田中不二麿[註1]の率いる文部省チームの「研究習学事項」のひとつとされ(青山1993、353を参照)、それは使節団派遣のそもそものきっかけとなったオランダ系アメリカ人の「お雇い外国人」ファールベック(Guido Herman Fridolin Verbeck, 1830－1898. なお類書ではフルベッキと慣用されてきたが、本稿ではオランダ音に従っている。）の構想書、いわゆる「ブリーフスケッチ（The Brief Sketch)」の段階ですでに「万物庫・書庫」として明記されていたことが明らかにされている(田中1993、44を参照)。また、後年出版された使節団の「公式報告書」(田中1993、42）である久米邦武編『特命全権大使米欧回覧実記』に表れた西洋文明への洞察の深さについて、たとえば田中（1978、431）は、「その社会の歴史的考察」と切り離すことのできない使節団の根源的な認識の「もっとも具体的なものを彼らは博物館のなかに見た」と指摘している。しかしながら、近年、岩倉使節団の特定の博物館視察について取り上げたり、一部で博物館に言及した研究が若干現れるようになったとはいえ(たとえば武田1993、中野1993、武田1993、長島1993、松宮1995)、そうした研究はいわゆる学際的なアプローチをとったもので、博物館界から岩倉使節団の意義を論究したものは管見のかぎり皆無である。日本の博物館史上にこの使節団の役割を正当に位置づける努力が払われてしかるべきであろう。

明治初めの知識人のあいだで、博物館とはいったいどのようなものとして理解されていたのだろうか。

すでに幕末には、万延元(1860)年の新見豊前守の使節団以来、毎年のように幕府による使節団が海外へ派遣され、博物館に関する知見もその他の海外事情とともにもたらされていたことが指摘されている(樋口、椎名1981、47－49および椎名1988、15－32)。新政府で大学大丞となっていた町田久成には「慶応元年3月薩摩藩の留学生としてロンドンに渡り、大英博物館やケンジントン博物館などを見学し」た経験があり、大学南校物産掛の田中芳男は慶応3(1867)年のパリ万博に派遣されたおりにフランスの博物館を実見していた（椎名1988、29および35)。また福沢諭吉は、慶応2（1866）年から刊行された『西洋事情』の初編で、博物館というものの各種について、動物園もふくめて紹介している。(福沢1866、中央公論社1969/1984、376)。しかし「蕃所調所の学者たち」が欧米の博物館についての知識を得て」いて、しかも「幕末に海外諸国を旅行した人たちによって、見聞した博物館の内容が紹介され」「近代博物館の概念がしだいにわが国で形成されるに至ったと考えられる」(樋口、椎名1981、47－48）にせよ、幕府の洋行使節や随員は、いわば沈みかけた―そして沈没した―船の乗組員たちであり、明治の博物館建設を実現した新政府のポリシーメーカーたちとはおのずから役割を異にしていたという点には留意が必要であろう。

日本の近代博物館建設の系譜は、明治初年の省庁の創設とも関係して錯綜しているが（樋口、椎名1981、49－58）現在の東京国立博物館にいたる内務省系博物館と、同じく国立科学博物館となる文部省系の教育博物館という主要な二本の潮流が指摘されている（椎名1988、44)。

前者については、12月にこの使節団が日本を発つことになる1871(明治4)年の4月25日に町田や田中らによって古文化財保存のための「建言」が大学名で太政官に提出され、同年5月23日には太政官布告「古器旧物之類ハ」が出されたことにその起源が求められている。同月中旬に開催された〈大学南校物産会〉は、自然史関係資料を中心にしており、いまだ「江戸時代に開かれた『物産会』や『薬品会』の域を出なかった」とされるが、翌1872(明治5)年に湯島聖堂（旧昌平校）の大成殿で開かれた「博覧会」は、

前年の太政官布告を受けて「古器旧物の保存とそれに対する知識の普及が強く前面に押し出されたものであった」と言われている（椎名1988、29－34および樋口、椎名1981、54、倉内、伊藤、小川、森田1981、7－8）。

いっぽう文部省系の教育博物館は、1872（明治5）年3月に文部省博物局で開催された博覧会に由来する（倉内、伊藤、小川、森田1981、190）が、これは1880（明治13）年に司法卿となって転出するまで「明治6年4月以来文部省の最高責任者として、省務を管理する立場にあった田中不二麿の構想によって推進され」たものであり（椎名1988、44）、ここで、その後の博物館政策に影響の大きかったこの田中不二麿や、畠山義成[註2]ら（例えば石附1986、153－155を参照）が岩倉使節団のメンバーであったことが想起される。

これらに続く第三の流れとして、博物場、物産陳列場、物産縦覧所、集産場、勧業展場、勧業博物館等々の名称で呼ばれる産業博覧会または「商品陳列所」（倉内、伊藤、小川、森田1981、350－370）が文明開化の担い手としてその後各地に陸続と設立され、これは「普通博物館にかわる新たな観覧施設として栄えるようになった」（椎名1988、223。なお同書55および221また、樋口、椎名1981、66－67に一覧が示されている）。つまり、日本の近代博物館の濫觴がウィーン万博への出展のための資料収集を直接のきっかけとする文化財保存および教育のための機関にあったとしても、岩倉使節団の米欧回覧の後で、日本の博物館が量的に拡大したばかりでなく、この「商品陳列所」を加えて質的にも多様化を遂げたことが分かる。農業、産業振興のための品評会である共進会も、これと同様にとらえられるものであろう。

この「商品陳列所」については「博物館という概念のなかに含めるにはあまりにも問題点が多い」とも言われているが（椎名1989、31）、日本の博物館がなぜそのような経過をたどることになったのかという内実こそむしろ重要であろう。そこで、本稿では、明治初期に博物館づくりの実務を担当した人々のみならず、その背後にあって博物館に関連した諸政策にゴーサインを出したり[註3]出さなかったり[註4]した内務卿大久保利通[註5]や右大臣岩倉具視、文部卿木戸孝允ら、時の政府の最高決定権者たちが、明治初年のイギリスで、どのような博物館見学体験を共有していたのかを少しく委細に復元する作業を通じて、日本の博物館史研究にひとつの視角を追加したいと思う。これはまた、日本の博物館の歴史を、海外の博物館の潮流と世界史的に照合する作業でもあるだろう。なお、岩倉使節団がパリ滞在中だった1872年12月に、留守政府によって旧暦から太陽暦への切り替えが実施されているが、本稿では特に断わりのない限り、太陽暦を使用している。

2．岩倉使節団について

ここで岩倉使節団について簡単に振り返っておこう。この使節団には以下のような特徴があった。まず、大使以下の正規メンバーが約50名（日本出発時には46名）、総勢100名をこえ、12カ国に及ぶ諸国歴訪の期間も1年9か月という、日本史に類例を見ない大型視察団である。加えて、この使節団は、右大臣岩倉具視をヘッドとして、副使に木戸孝允、大久保利通、伊藤博文ら枢要の人物をおいた実力者集団から構成されていた。彼らは帰国後、いわゆる明治6年の政変による征韓論派の排除など、その後の権力抗争を勝ち抜き（例えば田中1988、279および307）、内務卿となった大久保をトップとする、いわゆる薩長藩閥政府による文明開化路線を作っていった[註6]。その後伊藤が初代内閣総理大臣となったのをはじめ、使節団メンバーからは、初代の帝大総長や日銀総裁ほか、県知事や大臣等々の政府高官が輩出している。また、この使節団に随行した公費、私費の留学生の中からは、団琢磨、井上毅、金子堅太郎ら政・財界の実力者や、津田梅子、新島譲といった教育者が出ている。彼らは、上記した政府最高首脳の後援よろしきを得て、その地歩を築いていったと考えられる。

この使節団に与えられた使命は、天皇の名代として各国の元首に友好の挨拶をすること、不平等条約の改正準備交渉をすること、先進諸国の進んだ文物を視察すること、であった。第1点は儀礼的なものであり、2点めについては十分な成果があげられなかった（田中1978、420－424）。結果的には、3点めの文物視察における成果が、この使節団の果たした役割に対する近年の再評価の主たる対象となっている。本稿の主題である博物館も、この文物視察の一

環であったことはいうまでもない。

この使節団の視察内容は、大使に私設秘書として随行した久米邦武[四]が中心となって編修し、『特命全権大使米欧回覧実記』(以下『実記』と略。本稿では田中彰校注の岩波文庫版を使用している)として明治11年に博聞社から刊行された。これは3500部(セット)以上が印刷され、西洋世界を紹介する「一種のエンサイクロペディア」として広く影響を及ぼしたとされる(田中1993、3および47−50。また、その成立過程については福井1995に詳しい)。

次に、その研究史についてみておこう。田中(1993、1−11)は岩倉使節団の研究を「その公式報告書『特命全権大使　米欧回覧実記』の研究と重なるところが大きい」として、戦前の研究および戦後の3期に分けて論じている。戦前の作業は、若干の例外を除いてこの主題に関する研究の本流といえる外交史的な視点からの研究が中心であり、それが敗戦から1960年までの戦後第1期にも引き継がれた。1960年代に入ると加藤周一1961に見るように「思想史ないし比較文化史的研究」が登場する。

『実記』の覆刻の出版(宗高書房1977、岩波文庫版1977〜1982)を契機にした1976年以降の第3期の特色として、田中は以下の諸点を指摘している。本格的な歴史学研究が出てきたこと、個別研究の論文が発表されるようになったこと、「現地史料とりわけ当時の新聞史料の発掘と分析によってあらたな分析がはじめられたこと」そして研究の学際化、国際化が見られはじめたこと、『実記』の基礎史料の整備と研究およびこれを編修した久米邦武の研究が進展したこと。以上である。

その後、90年代に入ってから進行した急激な円高による国際化の進展を背景として、第3期として指摘された方向性での研究が進む一方で、1990年代後半になると、この主題の大衆化現象が見られるかのようである(宮永1997、岩本1998など)。特定国における使節団の博物館視察をテーマにした本稿は、方法論的には、第3期の特徴のひとつとして田中が指摘した、現地史料の掘り起こしによる一連の研究に続こうとするものである。

3．岩倉使節団の博物館視察

つぎに岩倉使節団と博物館という問題に絞って見ていこう。『実記』には、以下の箇所で博物館および類似施設への言及がある。数字は『実記』の巻数とページを示している。(表1)

表1

	館名または項目名	都市	実記の巻数、頁数
1	「ウードワルドパーク」(此ノ苑ハ禽獣園、草木園、博物館、及ヒ蔵画館ヲ兼タル場ナリ	サンフランシスコ	①81−83
2	鉱山博物館	セント・ペテルスブルク	①122及び124
3	スミソニアン博物館	ワシントンD.C.	①228
4	勧農寮	ワシントンD.C.	①240−241
5	南「ケンシントン」ノ博覧館	ロンドン	②64−69
6	「ハイトパーク」ニ於テ万国博覧会	ロンドン	②66−67
7	博物館、水族室	ブライトン	②70−71
8	「ヴィクトーリヤ」号ノ船	ポーツマス	②74
9	倫敦禽獣園	ロンドン	②77−78
10	「フリンス、アルベルト、ロード」ノ博覧会	ロンドン	②90−91
11	ロタンダ火器博物館	ウーリッチ	②93
12	ロンドン塔	ロンドン	②103−104
13	水晶宮(植物園、水族室を付設)	ロンドン郊外	②108−111
14	大英博物館	ロンドン	②112−114

	館名または項目名	都市	実記の巻数、頁数
15	博物館ニ観レハ、其国開花ノ順序	(博物館の意義)	②114－115
16	博物館（無料図書館＆博物館）	リバプール	②135
17	インジストリヤ博物館	エジンバラ	②209－211
18	「ダヘンシャ」ヂユークノ荘園	チャッツワース・ハウス	②310－315
19	「ウォリッキ」古城	ウォリック	②333－334
20	博物館（ウォリック市長のコレクション）	ウォリック	②334
21	農業展覧会	レディング	②373
22	印度博物館	ロンドン	②374
23	海軍病院	グリニッチ	②377
24	農業寮	ロンドン、イズリントン	②378
25	大書庫（国立図書館）および博古館	パリ	③69－72
26	コンセルワトワル	パリ	③72－74
27	「ボアデブロン」ノ苑（禽獣園を併設）	パリ	③159
28	大学校に付属せる博物館（およびシーボルト・コレクション）	ライデン	③247－248
29	プリンス・マウリッツホイス博物館	ハーグ	③249
30	奄特坦府禽獣園	アムステルダム	③261－263
31	「チェル」ノ大公園（禽獣園を併設）。夜、水族観	ベルリン	③311－314
32	ベルリン国立博物館	ベルリン	③324－325
33	農業博物館	セント・ペテルスブルク	④59－63
34	エルミタージュ博物館	セント・ペテルスブルク	④64－65
35	ハムボルク禽獣園	ハンブルク	④128
36	民種学の博物館と美術館	コペンハーゲン	④146－148
37	博物館	ストックホルム	④172－175
38	博古館（国立美術館）	ストックホルム	④177－178
39	工物展覧場	ストックホルム	④178－180
40	禽獣園	フランクフルト	④229
41	蔵画館	ミュンヘン	④246－249
42	博物観（ウフィッツィ博物館）	フィレンツェ	④276－278
43	聖彼得寺ノ博物館（バチカン博物館）	ローマ	④305－307
44	「カピトル」ノ博物館	ローマ	④314
45	大博物観（国立考古学博物館）	ナポリ	④328－329
46	「アルチーフ」の書庫（国立古文書館）	ベネチア	④350－351
47	万国博覧会（1873年）	ウィーン	⑤21－52
48	万国博覧会の歴史		⑤24－25
49	博物館及ヒ書庫（ベルン歴史博物館）	ベルン	⑤95
50	博物館	ジュネーブ	⑤102
51	農業博覧会	ヨーロッパ全般	⑤197－8
52	博物館	カイロ	⑤266

表1は吉田、遠藤（1993、97－98）をもとに、動物園の情報を補足、調製した。なお植物園については、『実記』中に別個の項目として言及されているものはない。イギリスに関しては現地の情報を加味して『実記』に博物館として言及されなかった博物館や、現在までに博物館となっている施設も含めて示しているために数の多さが目立つが、『実記』中に明記されているものだけを見ても、他に比較して最も多い。これは、滞在期間の長さと、博物館施設自体が、最も長期滞在したアメリカの場合、ヨーロッパに比較して未発達だったという理由が考えられる。とはいえ、イギリスの現地史料との突き合わせの結果、“南「ケンシントン」ノ博覧館”（②64）と“「フリンス、アルベルト、ロード」ノ博覧会”（②90）がじつは同じものであったということや、後述するブライトン水族館にみるように『実記』が必ずしも使節団の行動を網羅していないことも明らかになった。もちろん、使節団にとって初めての土地の歴訪だったことや、編者の久米が大使の私設秘書として岩倉に随行していたことによる『実記』の史料的な制約のためである。なお、『実記』には、博物館、博物観、博古館といった用語が随時、使用されているが（武田1993、109－110）意味のある使い分けというわけではなさそうである。観と館とは音が通ずる。

4．岩倉使節団とイギリス

では、次に、イギリスに問題を限定して見ていくとしよう。

イギリスの郵船オリンパス号で大西洋を渡った岩倉使節団は、1872年8月17日にリバプールに上陸したあと直ちに鉄道で南下し、その日の夜半にロンドンの宿舎に到着した。彼らはそこに6週間滞在して、外交使節としての業務の傍ら、首都の内外を視察している。続く6週間は、北部の産業都市とスコットランドを巡察。それから再びロンドンに戻って、ビクトリア女王への謁見をはさんで更に5週間ほど滞在し、12月16日に次の目的国フランスに向かっている。つごう4か月のイギリス滞在である。『実記』のイギリス報告の部分が全体の5分の1という分量を占めていることからも分かるように、日本と地理的に近似性をもち、しかも当時世界最強の国力を誇っていたこの立憲君主国家に、使節団は当初、その後の明治日本建設のモデルとなったプロシア以上の関心を寄せていた（田中1993、152－153）といわれ、イギリス滞在は、岩倉使節団にとって「旅程中、そのピークをなす」（森川1980、139）ものと考えられている。上記した博物館への言及の多さも、こうした関心を一定程度反映していると理解されよう。この他、イギリスに関してはバーミンガム滞在中の資料紹介として藤井1990がある。

この当時のイギリス社会は、1840年前後と言われる産業革命の終結（大塚1967）からほぼ一世代を経過し、経済的な繁栄のピークにあった。1851年の第一回ロンドン万国博覧会[188]を契機に、レジャーの大衆化も始まり、ポスト・インダストリー段階の兆候もほの見えてきた時期である。1870年代の末年からは、農業大不況によって土地貴族層の没落がはじまり、一方の産業資本じたいも金融資本へと変容していくことになるが、そうした社会変動の前夜であった1870年代初頭のイギリスは、さまざま矛盾を胚胎しながらも、繁栄の絶頂期にあったといってよいだろう。

この当時のイギリスで一般に公開されていた博物館として、表2のようなものがある。イギリスのほぼ全域で、既存の個人コレクションや地域の文芸協会、科学協会等の民間団体のコレクションが自治体に寄贈され、公立博物館が建設されてゆく過渡期的な状況にあったことがわかる。

表2　イギリスの博物館（1872年現在）

	館　　名	所在地（カッコに旧州名を付している。国名の無表記はイングランドを示す）	一般公開（年）
1	アバディーン大学人類学博物館	アバディーン（蘇＝スコットランド）	1871
2	カーティス博物館	オールトン（ハンプ州）	1855
3	アンプルフォース・コレッジ（教育）博物館	アンプルフォース（ヨーク州）	1802
4	ウェブスター記念博物館	アーブロース（アンガス州、蘇）	1840
5	バッキンガム州博物館	エイルズベリー（バッキンガム州）	1847
6	キャプテン・ジョーンズ博物館	バンゴー（カーナボン州、威＝ウェールズ）	1870
7	自然史科学協会博物館	バーンズリー（ヨーク州）	1867
8	市博物館、美術館	ベルファースト（愛＝アイルランド）	1833
9	クイーンズ大学自然史・地理学博物館	ベルファースト（愛）	1848
10	バーウィック博物館	バーウィック（ノーサンバーランド州）	1857
11	バーミンガム市博物館、美術館	バーミンガム（ウォリック州）	1867
12	ロイヤル・パビリオン博物館＊	ブライトン（サセックス州）	1861
13	ブリストル博物館	ブリストル（グロースター州）	1872
14	カーレオン博物館	カーレオン（モンマス州）	1850
15	無料図書館、博物館	カーナボン（カーナボン州、威）	1850
16	フィッツウィリアム博物館	ケンブリッジ（ケンブリッジ州）	1816
17	ケンブリッジ大学植物学博物館	ケンブリッジ（ケンブリッジ州）	1825
18	ケンブリッジ大学動物学・比較解剖学博物館	ケンブリッジ（ケンブリッジ州）	1866
19	ケンブリッジ大学鉱物学博物館	ケンブリッジ（ケンブリッジ州）	1867
20	王立博物館、公共図書館	カンタベリー（ケント州）	1825
21	聖アウグスティン使節コレッジ博物館	カンタベリー（ケント州）	1848
22	ローマン・ヴィラ	チェドワース（グロースター州）	1866
23	チェルトナム・コレッジ博物館	チェルトナム（グロースター州）	1870
24	コルチェスター＆エセックス博物館	コルチェスター（エセックス州）	1846
25	アースキン・オブ・トリー協会	カルロス（ファイフ州、蘇）	1872
26	ダービー博物館、美術館	ダービー（ダービー州）	1870
27	ウィルト州考古自然史協会博物館	デビジース（ウィルト州）	1854
28	ドーセット州博物館、図書館	ドーチェスター（ドーセット州）	1846
29	ドーバー博物館	ドーバー（ケント州）	1836
30	アイルランド・ナショナル・ギャラリー	ダブリン（愛）	1864
31	国立科学技術博物館	ダブリン（愛）	1732
32	トリニティコレッジ植物園	ダブリン（愛）	1785
33	トリニティコレッジ博物館	ダブリン（愛）	1777
34	エブベール図書館、科学協会博物館	エブベール（モンマス州、威）	1852
35	スコットランド・ナショナル・ギャラリー	エジンバラ（蘇）	1859
36	王立スコッティッシュ博物館＊	エジンバラ（蘇）	1854
37	エルギン＆モリー州博物館	エルギン（モリー州、蘇）	1836
38	ロイヤルアルバート記念博物館	エクセター（デボン州）	1868
39	公共図書館、美術館、博物館	フォークストーン（ケント州）	1870
40	ファルコナー博物館	フォレス（モリー州、蘇）	1860
41	フロム文芸科学協会博物館	フロム（サマセット州）	1845

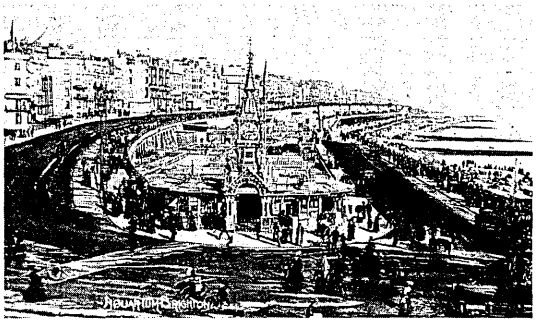
	館　　名	所在地（カッコに旧州名を付している。国名の無表記はイングランドを示す）	一般公開（年）
42	ガルウェイ大学考古学・地質学等博物館	ガルウェイ（愛）	1848
43	グラスゴー大学ハンテリアン博物館	グラスゴー（蘇）	1783
44	グロースター公共博物館、プライス記念館	グロースター（グロースター州）	1859
45	ベルブ博物館、中央図書館	ハリファックス（ヨーク州）	1831
46	ハウィック考古学協会（ウィルトン・ロッジ）	ハウィック（ロクスバラ州、蘇）	1856
47	ライハウス城博物館	ホデスドン（ハートフォード州）	1850頃
48	ハンティングドン文芸科学協会博物館	ハンティングドン（ケンブリッジ州）	1840
49	インバネス博物館	インバネス（インバネス州、蘇）	1825
50	イプスイッチ市自然史博物館	イプスイッチ（サフォーク州）	1847
51	ツィーサイド自然科学、考古協会博物館	ケルソ（ロクスバラ州、蘇）	1834
52	ケンドール市博物館	ケンドール（ウェストモーランド州）	1835
53	キューガーデン経済植物博物館	キュー（サリー州）	1847
54	リーズ哲学文芸協会博物館（パーク・ロー）(1921年以降、市立博物館)	リーズ（ヨーク州）	1820
55	レスター文芸哲学協会博物館、美術館(1849年以降、市立博物館、美術館)	レスター（レスター州）	1835
56	ラトクリフ・コレッジ博物館	レスター（レスター州）	1867
57	サセックス考古学協会博物館（バービカン）	ルイス（サセックス州）	1846
58	リッチフィールド図書館博物館	リッチフィールド（スタフォード州）	1859
59	リバプール公共（無料）博物館、図書館＊	リバプール（ランカ州）	1851
60	プラス・ニュイーズ博物館	スランゴスン（デンビー州、威）	1870代
61	ベスナル・グリーン博物館	ロンドン	1872
62	大英博物館＊	ロンドン	1753
63	ナショナル・ギャラリー(現在地への移転は1838年)	ロンドン	1824
64	ダルイッチ・コレッジ絵画館	ロンドン	1814
65	実践地質学博物館（ジャーミン街）	ロンドン	1841
66	全英薬剤師協会薬物学博物館	ロンドン	1842
67	王立植物協会博物館（リージェント・パーク）	ロンドン	1852
68	王立外科コレッジ博物館	ロンドン	1784
69	王立ユナイテッド・サービス博物館	ロンドン	1831
70	科学博物館、サウスケンジントン	ロンドン	1856
71	ジョン・ソーン卿博物館、図書館	ロンドン	1837
72	ロンドン塔、武器博物館（16世紀に現在地へ）＊	ロンドン	1530代
73	ロンドン大学博物館（ゴワ・ストリート）	ロンドン	1847
74	ビクトリア＆アルバート博物館＊	ロンドン	1852
75	ロタンダ火器博物館＊	ウーリッチ、ロンドン郊外	1819
76	ラドロー自然史協会博物館	ラドロー（シュロップ州）	1833
77	博物館、公共図書館（チリントン・マナハウス）	メイドストーン（ケント州）	1858
78	モルバーンコレッジ博物館	モルバーン（ウースター州）	1868
79	マンチェスター市美術館（モズリー街）	マンチェスター（ランカ州）	1829
80	モールバラコレッジ自然史協会博物館	モールバラ（ウィルト州）	1867
81	ビードハウス博物館	メルトン・モウブリー（レスター州）	1638

	館　　名	所在地（カッコに旧州名を付している。国名の無表記はイングランドを示す）	一般公開(年)
82	モントローズ自然史好古協会博物館	モントローズ（フォーファー州、蘇）	1843
83	ハンコック博物館	ニューカッスル（ノーサンバーランド州）	1822
84	ニューカッスル城塞博物館	ニューカッスル（ノーサンバーランド州）	1848
85	ノーサンプトン中央博物館、美術館	ノーサンプトン（ノーサンプトン州）	1865
86	ノーリッチ城博物館	ノーリッチ（ノーフォーク州）	1825
87	ウォラトンホール自然史博物館	ノッチンガム（ノッチンガム州）	1872
88	アシュモーリン博物館(ブロードストリート)	オックスフォード（オックスフォード州）	1683
89	オックスフォード大学博物館	オックスフォード（オックスフォード州）	1860
90	パイズリー無料図書館、博物館	パイズリー（レンフルー州、蘇）	1870
91	チャンパーズ協会博物館	ピーブルズ（レンフルー州、蘇）	1859
92	コンウォール王立地質学協会博物館	ペンザンス（コンウォール州）	1865
93	ピーターヘッド公共図書館＆アーバスノット博物館	ピーターヘッド（アバディーン州、蘇）	1850
94	プリマス協会＆デボン・コンウォール自然史協会博物館	プリマス（デボン州）	1812
95	ホームズデイル自然史クラブ博物館	ライゲイト（サリー州）	1857
96	ラグビー校美術博物館	ラグビー（ウォリック州）	1872
97	サフロン・ウォールデン博物館	サフロン・ウォールデン（エセックス州）	1832
98	王立博物館、美術館（ピールパーク）	サルフォード（ランカ州）	1849
99	南ウイルト州博物館	ソールズベリー（ウィルト州）	1860
100	ブラックモア博物館	ソールズベリー（ウィルト州）	1864
101	スカーバラ哲学考古学協会博物館	スカーバラ（ヨーク州）	1829
102	スポールディング紳士協会博物館	スポールディング（リンカーン州）	1710
103	ストックポート市博物館	ストックポート（チェー州）	1860
104	市立バースレム博物館	ストーク・オン・トレント（スタフォード州）	1863
105	市立パルマル博物館	ストーク・オン・トレント（スタフォード州）	1826
106	オークニー自然史協会博物館	ストームネス（オークニー、蘇）	1837
107	サンダーランド公共博物館、美術館	サンダーランド（ダラム州）	1836
108	南ウェールズ王立協会博物館	スウォンジー（グラモガン州、威）	1835
109	ツーソ無料公共図書館、博物館	ツーソ（カイスネス州、蘇）	1872
110	トーキー自然史協会博物館	トーキー（デボン州）	1844
111	ベントノー・ボンチャーチ文芸科学協会博物館	ワイト島（ハンプ州）	1846
112	ウォーリントン市博物館、美術館	ウォーリントン（ランカ州）	1848
113	ウォーリック州自然史考古学協会博物館	ウォーリック（ウォーリック州）	1836
114	ウィットビー文芸哲学協会博物館	ウィットビー（ヨーク州）	1823
115	ウィンチェスター博物館	ウィンチェスター（ハンプ州）	1847
116	ウィズビーチ博物館	ウィズビーチ（ケンブリッジ州）	1835
117	ビクトリア協会ヘイスティングス博物館	ウースター（ウースター州）	1833
118	ヨーク州博物館	ヨーク（ヨーク州）	1830

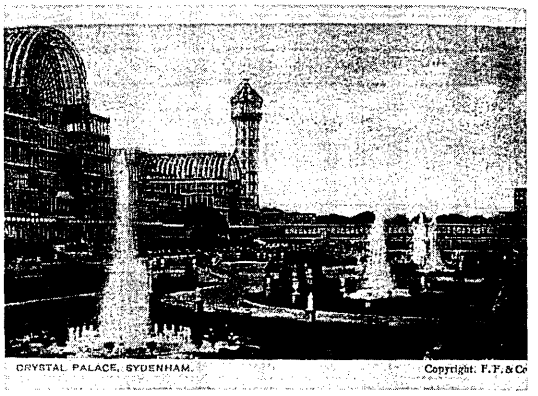
ミュージアムズ・アソシエーション1931から調整。岩倉使節団の訪問が明らかな館に＊印をつけている。年号は博物館としての一般公開の開始を基準としており、コレクションの開始じたいは更に時代をさかのぼるものがある。民間団体の公開コレクションや大学博物館も含まれており、すべてが公共博物館というわけではない。1872年現在で開館していたものが1931年の時点で消滅しているものはリストアップされていない。アイルランドも含んでいる。

図版 1

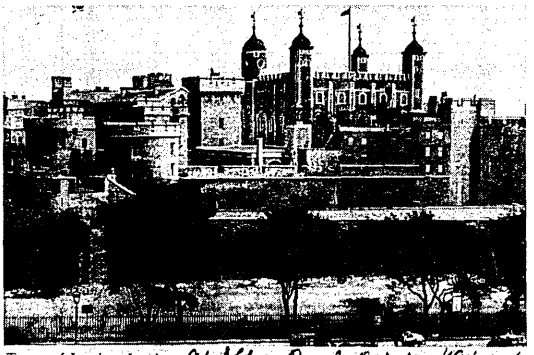
図版 2



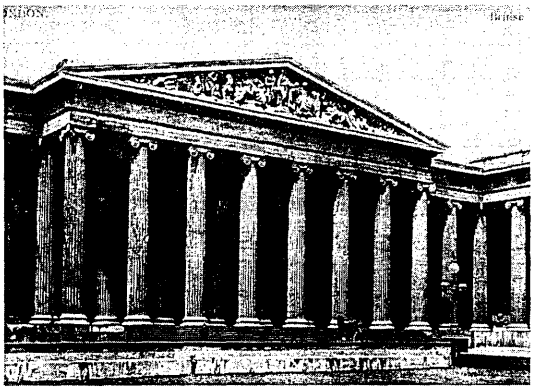
図版 3



図版 4



図版 5



図版、岩倉使節団の見たイギリス、ビクトリア時代の博物館および類似施設
—今世紀初頭の絵葉書から—

1．サウス・ケンジントン博物館（内部）。中央左にトラヤヌス皇帝の円柱が見える。こうした巨大な石膏模型コレクションはビクトリア・アルバート博物館に引き継がれて、現在も展示されている。
2．ブライトンの水族室（水族館）。海浜の保養地にあり、日本使節はここを数回、見学に訪れている。シーライフ・センターとして現存。現在、館内の一角にはビクトリア時代の展示が復元されている。
3．水晶宮。1851年の第一回万博の主会場を移築した鉄骨、ガラス張りの巨大なレジャー施設。庭園には当時、欧州一の高さと謳われていた大噴水がみえる。
4．ロンドン塔。ウィリアム征服王によって創建された城塞の内部には武器庫、宝物庫がある。武器コレクションはヘンリー８世によって開始され、エリザベス１世の時代に現在地に移されたもの。
5．大英博物館。使節団のレポートは、この博物館が大規模なことを強調しているが、この施設が市民の自発的な学習に貢献しているというコメントが注目される。1872年には自然史部門も併設されていた。

(以下、次号)

おことわり、注および文献は次回に一括して掲載させていただきます。あしからずご了承ください。